

生き物大好き！（発達を捉える）

子どもの主体的な活動を通して「科学する心」を育むには、子どもの興味や好奇心の在り方、環境への関わり方、発達の実情などを理解することが欠かせません。保育者は、子どもと共に生活するその時、その場での判断で、“よりよい環境設定や援助”を目指して保育をしています。その場に応じた判断をするためには、保育を振り返り、今後のねらいや方向性をもって、子どもと向き合うことが重要です。この実践は、保育を振り返って子どもの発達を捉え、課題や方向性を明らかにしています。

国立大学法人 京都教育大学附属幼稚園

3・5歳児

3歳児 カメ

カメはゆっくりとした動きで3歳児でも目で追うことができ、あまり恐怖心なく直接手で触ることができる。入園当初から3歳児保育室前にたらいを用意し、動物舎のカメを連れてきていた。すると子どもたちは、カメを持ち上げる、ひっくり返す、車のように見立てて走らせようとするなどの、自分本位の一方的な関わりをする姿が見られた。その都度、「カメさん痛いって言うているよ」「目をギョッとつむってはるわ」などと、カメの様子を伝えたり、思いを代弁したりするが、なかなか接し方に変化が見られなかったことから、しばらくカメを休ませていた。逃げ出したカメが見つかったことを機に、久しぶりにカメと関われる環境にした。

場面 1. 「また、やってみよう」

<5月上旬>



<イメージ写真>

Aさんは入園当初から、「カメさん連れに行こう」と、保育者の手を引いて動物舎に行こうとすることがよくあり、**カメの存在に心を惹かれる姿**が見られていた。この日も、着替えの途中でカメが気に入り、カメの所へ行行ってしっぽを持ち上げた。カメは引っ張られるのが嫌で、逃げようとして首を反り返し、手足をバタバタと動かしていた。その時、しっぽを持ち上げられて、逃れようと手足に力を入れたカメはひっくり返ってしまうが、器用に首を反り返して元に戻った。そのカメの姿を見て、Aさんは再びカメの体をひっくり返し、カメのしっぽを持ち上げる。すると、カメは上手に体を元に戻す。それを**何度も繰り返していた**Aさんの傍で、保育者は時々カメの様子を伝え、見守っていた。

<読み取り>「触ってみたい」「実際に触ったらこうなった」という偶然的積み重ねにより、Aさんは、「もっと触りたい」という欲求につながっていったと感じる。また、何度も繰り返す姿から、自分の関わりに対して生き物が反応したことにより、さらに惹きつけられていることが分かる。

振り返り 3歳児は、生活の中に新たな事象との出会いが多くある。その事象との出会いで、“何となく気になる”、“惹きつけられる”といった興味が原動力となって、実際の事象と関わっていく。その関わりは、触る・見る・聞く（聴く）・嗅ぐなどの、五感を通じたものであることが分かってきた。また、自分が関わった後の生き物の反応に面白さを感じたり、驚いたりして、生き物との関わりに夢中になっていく姿が見られた。このように、無意識的な“何となくやってみる”という五感を通じた関わり自体が、「不思議・面白い・楽しい」といった感情となり、満足するまでその関わりを繰り返していくことへと結びついていく。この“**やってみてみたい気持ち**”が後の科学的思考の土台となり、この気持ちを3歳児では、「十分に経験し耕しておくことが大切」である。

その土台作りとして、信頼関係のある保育者や周りの大人が子どもの思いを読み取ったり、その子どもに適した環境を整えたり、声をかけたりするなどの援助が重要であると考えられる。また、思いのままに一方的な関わりをする姿が見られた際には、保育者が生き物の気持ちを代弁したり、様子を伝えたりし続けることで、子どもが生き物を大切に思ったり、相手を慮ったりする気持ちを育んでいきたい。

5歳児 チャボ

「5歳児としての**責任感**」「ウコッケイやチャボと心を通わせ、**親しみを深める**」「**好奇心や探究心をもって見たり関わったりする**」などをねらいに、園庭の動物舎のウコッケイ・チャボ・カメの世話を、“動物当番”として行っている（衛生面に関しては獣医師からの指導を受けている）。例年、2月に5歳児が1年間、**責任をもって、また親しみを深めながら世話をしてきた生き物のことや、世話の仕方を、「次は君たちの番だよ**



と思いを込めて、4歳児に引き継いでいる。平成30年度の新5歳児も、保育室の新たな玩具や環境に目を輝かせながら、「動物当番もせな！」と、期待する声が多く聞かれていた。

場面 2. 「赤ちゃんにしたい」

<4月中旬>

動物当番初日。当番の子どもたちが動物舎で卵を2個見つけて興味をもち、どうしたいか話し合う。「お母さんから取ったらかわいそう」「赤ちゃんにしたい」「卵を持って帰らないで、お母さんの側に置いておく」と確認する。



場面 3. 「卵の温度に気づく！」

<4月中旬～5月中旬>

動物舎の卵は5個に増えていた。卵に触れたBさんが「温かい…」とつぶやくと、他の3人も触り、「ほんまや」と言う。他の4つも触ると、Bさんが気づいた最初の1個だけが温かいことが分かる。そこで、「温かい卵と温かくない卵の種類なのか？」との疑問から、「卵はお母さんがお腹の下で抱っこする」と知り、「チャボは抱いていない」「温めないと生まれない」「手で温めたらいい」「お布団は？」「お湯に浸けたら？」「太陽に当てるのは？」などと、一人一人が自分なりに卵を温める方法を考える。そして、「卵を保育室に持ってくる」「毛糸地の端切れや綿で卵を包む」「ウサギ用の牧草を卵の容器に敷き詰める」「お湯で温める」など、いろいろな方法を試す。

お湯で温めていた卵の世話をしているひびが入った時、みんなが集まり、「どうなっているか？」と興味をもち、観る。卵を割り、ドロツとした黄身と白身を見た子どもたちは、「なんで目玉焼きが?!」「まだ割ったらあかんかったと違う?」「ヒヨコが出ていったってこと?」などと口々に言う。翌日、家庭で調べてきたCさんDさんの話から、38度にすることが分かり、体温計で卵の温度を測るようになる。

場面 4. 「親鳥のことを考えよう」

<5月下旬～7月>

Eさんが「なんか卵が臭い」、「ほんまや。卵が臭いってことは…」と保育者が言うと、Fさんが「赤ちゃんが生まれへんってこと?」、Gさんが、「(週末の)3日間何もお世話してへんから?」と、卵の異変に気づいて話し合う。その後、卵が生まれてから21日で孵る情報や、卵が息をしていることや有精卵・無精卵など獣医から話を伺い、場をきれいにし、牧草を入れ、卵を温めるのに良い環境を整える。

しかし、その後も卵を産み、温め続ける親鳥の様子が心配になる。そこで、5歳児全員でこれからの世話について話し合い、夏休みの間、親鳥を休ませることにする。

振り返り 5歳児は、数人の願いが皆の一つの目的になり、自分たちなりに考えたり試したりして、予期せぬ出来事や上手くいかないことが起きても、原因を考えたり新たな情報を得たりして解決に向かおうとした。また、その願いは長い期間(数ヶ月)継続し、家庭へも広がった。保育者は、一人一人が思いを出し合い、意見が広がる時は、論点を焦点化したり、当初の目的に立ち返ってみたり、新たな情報を知らせたりなど、子どもが方向性をもてるように整理していく援助が大切になる。その上で、情報や絵本等から知識だけで考えるのではなく、実際に行動して、「自分たちで考えた」と実感できるようにすることが重要となる。さらに探究活動では、子どもの疑問に応じる専門家との関わりは貴重な情報を獲得する体験につながる。そして、体を通した五感(臭い・見る)が、直感的な気づきや納得にもつながっていく経験を積み重ねていくことで、次への予測が生まれ、新たな情報についても以前の経験と絡めて考えたりしながら、より深い理解や納得にいたる姿が見られた。

いろいろ試したり、失敗したりしながらも、卵への理解が深まり、心情的な側面も深まりが感じられた。だからこそ、「雛が生まれて欲しい」という願いがあるものの、自分たちがしたい思いだけではだめで、状況を鑑みて、時には我慢が必要な場合もあることなど、親鳥や卵の立場に立って折り合いをつけようともしていた。



[考察]

【発達を捉える】 3歳児では、原初的な興味からの関わり、五感を通しての経験を積み重ねて、「科学する心」の土台を築きあげる。そして、5歳児では、今までに積み上げてきた知識を基に、友達や仲間と探究を深め予測するという、思考の深まる姿が見られる。このように、幼児期の子どもの育ちの中で適した環境や保育者の声掛け、仲間とのつながり、子どもと保育者がともに楽しむことで、子どもの興味や関心を深めることができると思う。

【課題と今後の方向性】 生き物は命ある存在である。その命ある存在を「教材」と呼ぶことに抵抗を感じ、子どもたちに育つ「科学する心」を思う時、生き物との間で保育者は葛藤する。保育者も子どもと同じように生き物に心を寄せると、よりその葛藤は大きなものになる。子どもにも生き物にも真摯に向き合い、様々な感情体験を、保育者も子どもたちとともに味わい、共感し合うこと自体が、「科学する心」を育てる土台であり、環境・援助となるのではないかと考える。